

叙述関係を表す NP1 ノ NP2

言語学・応用言語学専門分野
2009（平成 21）年入学
1LT09134T
松山 佳保里
2013（平成 25）年 1 月提出

要旨

2つの名詞を格助詞である「の」でつないで「名詞十の十名詞」とする修飾表現が存在する。本論文ではこれを「NP1 ノ NP2」と表す。この表現に関しては現在まで様々な観点から研究がなされてきたが、これまであまり触れられてきていない形の表現がある。それは「お姉ちゃんのうそつき」という形の表現あり、「NP1 ハ NP2 デアル」という叙述関係を持ったものだ。本論文では「お姉ちゃんのうそつき」型と呼ぶ。「NP1 デアル NP2」と表される表現と似ているが、「お姉ちゃんのうそつき」型は特殊で独自の条件を持つ。たくさんの例を挙げて考察した結果、「お姉ちゃんのうそつき」型の表現は NP1 に相当する人に向けて発話されるものであり、そうでない場合には使われないことがわかった。また、NP1 に関して i) 人や動物、あるいは擬人化されたものであること、ii) NP1 に直接呼びかけるときの名詞であることの2点が、NP2 に関して i) 名詞のもともとの性質に関わらず否定的な意味を含むこと、ii) 単語の性質で容認性が変わることの2点が条件として挙げられることを主張した。これまでトピックとして挙げられなかった「お姉ちゃんのうそつき」型の表現について、その条件を提案した。

目次

1. はじめに.....	1
2. 先行研究と問題点.....	3
2.1. 三宅(2011).....	3
2.2. 西山(2003).....	4
2.3. 問題提起.....	5
3. 考察.....	6
3.1. NP1 の条件.....	6
3.2. NP2 の条件.....	10
3.3. 「NP1 / NP2」と「NP2 / NP1」のちがい.....	14
4. まとめ.....	16
参考文献.....	18

1. はじめに

名詞と名詞を格助詞「の」でつなげた名詞句は実に多様な表現があり、この表現についてこれまでに様々な視点からたくさんの方が研究がなされてきている。本論文ではこのような名詞句の表現を「NP1 / NP2」と表記する。2011年度後期に開講された上山あゆみ先生の授業で格助詞「の」に関する講義があり、そのときの講義資料によると「NP1 / NP2」という表現について以下のように解説している。

- (1) 「NP1 / NP2」を「NP1 ハ NP2 ダ」と言い換えたときに、NP2 が NP1 の属性を示す場合には、「NP2 / NP1」という表現の意味も理解できる。
- a. 太郎の友達
 - b. 太郎は友達だ → 友達の太郎 [上山 2011:7 (33)]
- (2) 「NP1 / NP2」を「NP1 ハ NP2 ダ」と言い換えて意味が通じない場合には、「NP2 / NP1」という表現も容認不可能である。
- a. 太郎の女友達
 - b. *太郎は女友達だ → *女友達の太郎 [上山 2011: 7 (38)]

(1)について、(1a)は太郎が親しくしている友達の誰かのことであり、「太郎≠友達」である。したがって、「太郎は友達である」という意味にはならない。それに対して(1b)の「友達の太郎」は、誰かにとって友達である太郎のことであり、「太郎=友達」である。したがって「太郎は友達である」という意味になる。つまり、(1a)と(1b)は NP1 と NP2 を入れ換えてもそれぞれ意味が理解できる名詞句であるが、入れ換えると名詞句が表す意味が変わってしまう。「NP1 / NP2」を「NP1 ハ NP2 ダ」と言い換えた時点でこの2つの表現の意味がちがったものになってしまうのである。

これに対して、以下の文は(1)とは異なった例である。

- (3) a. お姉ちゃんのうそつき
b. お姉ちゃんほうそつきだ → うそつきのお姉ちゃん

(3)は(1)のように、(3a)を「お姉ちゃんほうそつきだ」と言い換えることができる表現のうちのひとつである。しかし、(3)では(3a)も(3b)も「お姉ちゃんほうそつきである」という意味の表現であり、NP1 と NP2 を入れ換えても「お姉ちゃん=うそつき」である。つまり、(1)とは違い「NP1 / NP2」を「NP1 ハ NP2 ダ」と言い換えても2つの表現の意味は同じである。

しかし、(3)と似たような表現であっても以下の文は容認されない。

- (4) a. *娘のふつつか者
 b. 娘はふつつか者だ → ふつつか者の娘
- (5) a. *太郎の努力家
 b. 太郎は努力家だ → 努力家の太郎

では(3)のような表現には一体どのような特徴があるのか、似たような表現でも容認できないものがあるのはなぜか、その条件について考察する。

2. 先行研究と問題点

2.1. 三宅(2011)

寺村(1991)は「NP1 / NP2」という形の名詞句が、「所有」「場所」「種類」「内容」「全体と一部」「同格」…など多様な意味関係を表すことができるということを指摘している。それに対して三宅(2011)は、寺村(1991)の主張を汲みながらも主要部の位置という観点で NP1 / NP2 を 3 つに分類できると主張した。三宅(2011)において「主要部」とは「句全体の範疇を規定する中心的要素」あるいは「意味的な中心要素」などと定義されるものであるとし、日本語では句の種類を問わず後置(右側)が原則であると示している。三宅(2011)が主要部の位置に着目して定義した分類は以下の 3 つである。

- (6) 「主要部後置型」…日本語において極めて一般的な NP2 が主要部となるもの
 「主要部同格型」…NP1 に内在する性格を Y で明示するもの
 「主要部倒置型」…主要部である NP1 が倒置されたもの

以下の(7)-(9)は、(6)の 3 つの分類に当てはまる例である。

- (7) 「主要部後置型」
 a. 私の辞書 [三宅 2011: 80 (1a)]
 b. カメラのレンズ [三宅 2011: 80 (1e)]
- (8) 「主要部同格型」
 a. チューリップの花 [三宅 2011: 82 (3)]
 b. 桜の木 [三宅 2011: 82 (4)]
- (9) 「主要部倒置型」
 a. シェークのパニラ [三宅 2011: 86 (20)]
 b. カローラの 1500cc [三宅 2011: 86 (25)]

三宅(2011)は「主要部倒置型」について、NP1 と NP2 の名詞を入れ換えても等価な意味関係を表すことができる名詞句をつくることができると述べている。(9a)の「シェークのパニラ」を例にとると、日本語は主要部後置の言語であるという考えから名詞を入れ換えた「パニラのシェーク」の方が基本的な表現であり、「シェークのパニラ」はある条件下で主要部が倒置された特殊な表現である、と三宅(2011)は考える。三宅(2011)の主張では、特殊な表現とする「主要部倒置型」が成り立つ条件は「NP1 / NP2 における NP2 が選択的に NP1 を限定する」というものである。ここでの「選択的」とは、容易に想定できる選択肢のうちのいずれかを選ぶことを指す。つまり、三宅(2011)の主張に沿うと(3b)は(3a)と等価な意味を表す名詞句であるということである。たしかに(3a)も(3b)も「お姉ちゃんほうそつきである」と

いう意味を表すため等価な表現であると言える。しかし(3a)は NP2 (うそつき) が選択的に NP1 (お姉ちゃん) を限定している、と言えるのだろうか。(3a)の「お姉ちゃんのうそつき」が発話される状況を細かに考えてみるとそうとは言えない。

まずは、「シェークのパニラ」が発話される状況について詳しく見てみる。ファーストフード店などでシェークを注文するとき、A さんが容易に想定できる選択肢がパニラ、チョコレート、ストロベリー、ミルクの 4 つであったとする。このとき、注文に際して選択肢の中からシェークの種類を限定しなければいけないので「シェークのパニラ」が注文する人から発話されるのである。三宅(2011)の主張通り、NP2 (パニラ) が NP1 (シェーク) を限定している。では、「お姉ちゃんのうそつき」は同じような状況になるかを考えてみる。A さんが「お姉ちゃんのうそつき」と発話する時、それ以前に「お姉ちゃん」と呼ばれる人物 (以下 B さん) が嘘をついたという事実あるいは A さんの認識が必要である。そうすると、B さんが嘘をついた→A さんが B さんに対して「B さんはうそつきである」と思う→A さんが「お姉ちゃんのうそつき」と発話する、という流れが必要となる。この場合は選択的に NP1 (お姉ちゃん) を限定していることにはならず、NP2 (うそつき) は NP1 (お姉ちゃん) の属性に過ぎない。パニラのシェークとチョコレートのシェークは全く違うものだが、うそつきの B さんと人気者の B さんは同じ B さんである。また、NP1 (お姉ちゃん) と NP2 の間には叙述関係があることがわかる。つまり、「主要部倒置型」が成り立つための条件である「NP1 / NP2 における NP2 が選択的に NP1 を限定する」は(3a)に当てはまらない。

2.2. 西山(2003)

西山(2003)は、名詞句の意味を発話のなかでの語用論的解釈という視点で以下のように分類した。

- (10) タイプ A : NP1 と関係 R を有する NP2
 タイプ B : NP1 デアル NP2
 タイプ C : 時間領域 NP1 における NP2 の指示対象の断片の固定
 タイプ D : 非飽和名詞 NP2 とパラメータの値 NP1
 タイプ E : 行為名詞句 NP2 と項 NP1

以下の(11)-(15)は、(10)の 5 つの分類に当てはまる例である。

- (11) タイプ A
 a. 洋子の首飾り [西山 2003: 16 (28)]
 b. 北海道の俳優 [西山 2003: 16 (29)]

- (12) タイプ B
 a. コレラ患者の大学生 [西山 2003: 19 (36)]
 b. ピアニストの政治家 [西山 2003: 19 (37)]
- (13) タイプ C
 a. 東京オリンピック当時の君 [西山 2003: 31 (76)]
 b. 大正末期の東京 [西山 2003: 31 (78)]
- (14) タイプ D
 a. この芝居の主演 [西山 2003: 33 (84)]
 b. 『源氏物語』の作者 [西山 2003: 33 (88)]
- (15) タイプ E
 a. 物理学の研究 [西山 2003:40 (110)]
 b. パスポートの紛失 [西山 2003: 40 (112)]

西山(2003)で示された(10)の分類に沿うと、(3b)はタイプ B に当てはまる。西山(2003)のように(3b)を言い換えると、「うそつきデアルお姉ちゃん」となる。これは「NP1 が叙述的な意味を表し、NP2 がその叙述があてはまる対象である」という西山(2003)の主張にも合致する。これに対し、(3a)も NP1 (お姉ちゃん) と NP2 (うそつき) の間には叙述関係があると言えるが、西山(2003)のタイプ B には当てはまらず、また(10)に挙げたどのタイプにも当てはまらない。

2.3. 問題提起

本論文では、(3a)のように叙述関係を持つ「NP1 / NP2」という形の表現に焦点を当て考察する。考察する上での問題点は以下の通りである。

- (16) 「お姉ちゃんのうそつき」型の NP1 / NP2 が生起するためには、どのような条件が必要なのか。

この問題点について、(3)と同じ形の「NP1 / NP2」の表現を例に挙げて考察していく。

3. 考察

「お姉ちゃんのうそつき」型の NP1 の NP2 が発話される場面として、以下の2つが考えられる。

- (17) a. 話者の目の前に対象となる NP1 が存在している時
b. 話者が聞き手に対してではなく、話題として挙げられている（その場にはいない）NP1 に対して発言する時

それぞれの場面について詳しく説明する。まず(17a)は A さんと B さんが話している状況で、A さんが B さんに向かって「B さんの NP2」と言う場合である。それに対して(17b)は A さんと C さんが話している状況で、A さんが C さんに対してではなくその場にはいない B さんに対してまるでひとり言のように「B さんの NP2」と言う場合である。わかりづらい状況なので、具体的な例文を以下にします。

- (18) 母と娘が、その場に不在の父について話している場面
母 「お父さん、もう先に外に出でしまったわよ。」
娘 「もう、お父さんのせっかち。」

この場合、表面上は A さん（娘）が C さん（母）に対して「B さん（父）の NP2（せっかち）」と発言しているように見えるが、A さん（娘）は「B さん（父）の NP2（せっかち）」と C さん（母）に対して伝えたいわけではなく、B さん（父）に対する言葉である、ということだ。(17)は「お姉ちゃんのうそつき」型の NP1 / NP2 が発話される状況として、以下のよう言い換えられる。

- (19) 話者が、第三者ではなく対象となる NP1 に直接訴える内容を発話する時

このように特殊な「お姉ちゃんのうそつき」型の NP1 / NP2 について、NP1 と NP2 それぞれの条件を考察する。

3.1. NP1 の条件

NP1 に様々な名詞を入れながら、容認できる例と容認できない例にわけてその特性を考える。また、NP1 についてのみの考察をすすめるために、文の意味が通る限り NP2 は「うそつき」を使用する。

まずは容認できる例をいくつか列挙する。

- (20) a. 太郎のうそつき
b. 太郎はうそつきだ → うそつきの太郎

- (21) a. 花子ちゃんのうそつき
b. 花子ちゃんはうそつきだ → うそつきの花子ちゃん

- (22) a. タマの寝ぼすけ
b. タマは寝ぼすけだ → 寝ぼすけのタマ

これら(20)-(22)は、NP1 に名前が入る場合である。(21)から敬称が加わっても問題はないことがわかる。また、(22)の「タマ」が容認可能になることから、人間でなくて動物も NP1 に使うことができることもわかった。

- (23) a. お父さんのうそつき
b. お父さんはうそつきだ → うそつきのお父さん

- (24) a. ママのうそつき
b. ママはうそつきだ → うそつきのママ

(23)(24)では、NP1 の「お父さん」や「ママ」は総称・集団としてではなく話者にとっての「お父さん」や「ママ」である。つまり、(23)で言う「お父さんというものはすべてうそつきだ」という意味ではなく、「話者のお父さんはうそつきだ」という意味である。(24)も同様である。しかし、以下の例は容認されない。

- (25) a. *父のうそつき
b. 父はうそつきだ → うそつきの父

- (26) a. *母のうそつき
b. 母はうそつきだ → うそつきの母

自分のお父さんのことを「父」と呼ぶ場面は多数存在するが、いつもお父さんのことを「父」と呼んでいなければ、(19)のような条件下において(25a)のような表現は発話されない。(26a)に関しても同様である。つまり、話者が NP1 を実際にどのように呼んでいるかという点が「お姉ちゃんのうそつき」型の NP1 になり得るかどうかのポイントであることがわかる。夫婦を例にして考えてみよう。夫である男性は妻である女性のことを普段名前（〇〇と表記する）で呼んでいるとする。夫である男性は第三者と妻を話題にして話すとき、「妻」や「家内」などと表現することはとても多い。しかし、実際に妻である女性を目の前にして「妻」や「家内」と呼びかけることはほとんど無い。「お姉ちゃんのうそつき」型の発話をするとしたら、「〇〇の NP2」と言わなければ容認されない。似たような名詞でお兄ちゃん、お母さん、おばあちゃん、おじいちゃん、叔母さん、叔父さんなどは NP1 として容認可能であるが、姉、

兄、妹、弟、母、息子、祖母、祖父、おば、おじ、いとこ、猫など呼びかけに使わない語は NP1 として容認されない。このことから(4)が容認されないことも説明ができる。次に挙げている例も、これらと似た例である。

- (27) a. 先生のうそつき
b. 先生はうそつきだ → うそつきの先生
- (28) a. 監督のうそつき
b. 監督はうそつきだ → うそつきの監督
- (29) a. 先輩のうそつき
b. 先輩はうそつきだ → うそつきの先輩

(27)-(29)の「先生」「監督」「先輩」は総称・集団としての名詞では「お姉ちゃんのうそつき」型の NP1 として容認されない。特に「先生」や「先輩」は話者にとってそのように呼べる人がたくさんいる可能性が高い。しかし、(19)の条件下であれば「先生」や「先輩」のように表面的には誰を指しているのかわからない表現であっても、話者の中で伝えたい相手が明確であれば発話される。同じような名詞で、コーチ、キャプテン、店長、主任、社長、リーダーなども対象に対して話者がそのように呼んでいるのであれば容認可能になる。これに対し、以下の例は容認されない。

- (30) a. *生徒のうそつき
b. ?生徒はうそつきだ → うそつきの生徒
- (31) a. *選手のうそつき
b. ?選手はうそつきだ → うそつきの選手
- (32) a. *後輩のうそつき
b. ?後輩はうそつきだ → うそつきの後輩
- (33) a. *担任のうそつき
b. 担任はうそつきだ → うそつきの担任

(30)-(32)は NP1 の対象となる人に向かって「生徒」や「選手」と呼びかけることはない。同じ理由で部下、社員、部員、メンバーなどは容認不可能である。また(33)の「担任」は(27)の「先生」と似ている名詞だが、話者にとって担任である先生を話題の中で「担任」と呼ぶことはあっても、本人に向かって「担任」と呼びかけることはない。この点で「担任」は「先

生」と異なっているため、(27)と(33)は容認に差が出ている。これらの点から、「おねえちゃんのうそつき」型の NP1 になるためにはやはり対象の呼び名であることが重要だと考えられる。

以下の例は、人称代名詞や指示代名詞を使った例である。

- (34) a. *君のうそつき
b. 君はうそつきだ → うそつきの君
- (35) a. *彼のうそつき
b. 彼はうそつきだ → うそつきの彼

(34)は「君」と言っているくらいなので目の前に NP1 である「君」がいてもいいはずではあるが、(35)と同じく容認されない例である。NP1 となる対象が話者の中でどんなに明確になっても、人称代名詞や指示代名詞が NP1 にくると「お姉ちゃんのうそつき」型の NP1 / NP2 は容認されなくなってしまう。これは NP1 に入る対象に対して話者にとって特有の呼び方である必要があり、あらゆる人に呼びかけとして同じように使うことができる「君」のような人称代名詞もしくは指示代名詞を含む表現は容認されないと考えられる。しかし、これには例外がある。

- (36) a. 私のうそつき
b. 私はうそつきだ → うそつきの私

(36)の「私」は紛れもなく人称代名詞であるが、容認可能な例である。話者が自分自身のことを「私」と呼ぶ場合、訴えかける相手も自分自身であり、自分以外の誰でもない状況に置いて発話されるので容認可能になると考えられる。また、自分自身以外を一人称で呼ぶことがないということも一因と考えることができる。

また、道具や機械でも擬人化されたような表現だと容認可能になる。

- (37) 刃こぼれしていて紙が切れないハサミを使った時
a. ハサミの役立たず
b. (この) ハサミは役立たずだ → 役立たずのハサミ
- (38) パソコン使用中に画面上の操作がうまくいかない時
a. パソコンの頑固者
b. (この) パソコンは頑固者だ → 頑固者のパソコン

(39) プリンターの調子がよくない時

- a. プリンターの気分屋
- b. (この) プリンターは気分屋だ → 気分屋のプリンター

本来 NP1 に入る道具や機械を扱っている人が上手に使用したり操作しなければいけないところを、何か他に原因があって上手くいかずに NP1 自体が NP2 であるかのように擬人化した表現である。しかしこれは稀で、NP1 に物が入ると「NP1 / NP2」の形では容認不可能なものが多い。

(40) a. *レポートのできそこない

- b. (この) レポートはできそこないだ → できそこないのレポート

(41) a. *スカートのぴったり

- b. (この) スカートのぴったりだ → ぴったりのスカート

(42) a. *携帯電話の最軽量

- b. (この) 携帯電話は最軽量だ → 最軽量の携帯電話

NP1 に道具や機械などの名詞がきたとき、「NP1 ハ NP2 ダ」と言い換えると少し違和感がある。ハサミを例に挙げてみると、「ハサミは役立たずだ」と言うとすべてのハサミが役に立たないかのように聞こえる。「ハサミは」と言ってしまうと自分が手に持っているハサミのことではなくてハサミがトピックのようになってしまうためである。なので、NP1 が道具や機械などの場合は「このハサミは役立たずだ」というように、示すものを明確する「この」を入れると、「ハサミの役立たず」と同じ意味で容認可能な文になる。

NP1 に関する考察をまとめると、以下のようになる。

(43) a. 人や動物を表す名詞、あるいは物を擬人化した名詞である必要がある

- b. 話者が対象となる NP1 に直接呼びかける特定の呼び名である名詞でなければ容認されず、あらゆる人に同じように使う人称代名詞や指示代名詞を含む名詞では容認されない

3.2. NP2 の条件

NP2 に様々な名詞を入れながら、容認できる例と容認できない例にわけてその特性を考える。また、NP2 についてのみの考察をすすめるために、文の意味が通る限り NP1 は「太郎」を使用する。

(44) a. 太郎の意気地なし

- b. 太郎は意気地無しだ → 意気地無しの太郎

(45) a. 太郎のお人好し

- b. 太郎はお人よしだ → お人好しの太郎

(46) a. 太郎の優柔不断

- b. 太郎は優柔不断だ → 優柔不断の太郎

(47) a. 太郎の世間知らず

- b. 太郎は世間知らずだ → 世間知らずの太郎

(48) a. 太郎の卑怯者

- b. 太郎は卑怯者だ → 卑怯者の太郎

(49) a. 太郎の方向音痴

- b. 太郎は方向音痴だ → 方向音痴の太郎

(50) a. 太郎の意地っ張り

- b. 太郎は意地っ張りだ → 意地っ張りの太郎

(51) a. 太郎の泣き虫

- b. 太郎は泣き虫だ → 泣き虫の太郎

(52) a. 太郎の遅刻魔

- b. 太郎は遅刻魔だ → 遅刻魔の太郎

(53) a. 太郎のお調子者

- b. 太郎はお調子者だ → お調子者の太郎

(54) a. 太郎のわからず屋

- b. 太郎はわからず屋だ → わからず屋の太郎

(55) a. 太郎のせっかち

- b. 太郎はせっかちだ → せっかちの太郎

- (56) a. 太郎の根性無し
b. 太郎は根性無しだ → 根性無しの太郎

- (57) a. 太郎のさぼり魔
b. 太郎はさぼり魔だ → さぼり魔の太郎

- (58) a. 太郎の寝ぼすけ
b. 太郎は寝ぼすけだ → 寝ぼすけの太郎

- (59) a. 太郎のばか
b. 太郎はばかだ → ばかの太郎

- (60) a. 太郎の食いしん坊
b. 太郎は食いしん坊だ → 食いしん坊の太郎

- (61) a. 太郎の八方美人
b. 太郎は八方美人だ → 八方美人の太郎

- (62) a. 太郎の恥ずかしがり屋
b. 太郎は恥ずかしがり屋だ → 恥ずかしがり屋の太郎

以上(44)-(62)の NP2 に関して言えることは、否定的な表現である名詞だと言うことである。また、「○○屋」「○○者」「○○魔」などの表現は容認できる名詞に多いパターンである。(4)では、NP2 が「ふつつかも」という NP1 を謙遜して言うのに使われる表現である。否定的な表現のようだが(4a)は使われない。これは前述の通り、NP1 の「娘」が NP1 になり得る条件を満たしていないからであると考えられる。

- (4) a. *娘のふつつかも
b. 娘はふつつかものだ → ふつつかもの娘

また、人を褒めるような表現やポジティブな表現が NP2 に入ると、たとえ容認可能になるとした名詞を NP1 に入れても容認性が低くなる。しかし「NP1 ハ NP2 ダ」という表現と NP1 と NP2 を入れ換えた名詞句 (NP2 ノ NP1) に関しては、NP2 がポジティブな表現でも容認可能である。

- (63) a. *太郎の人気者
b. 太郎は人気者だ → 人気者の太郎

- (64) a. *花子の頑張り屋
b. 花子は頑張り屋だ → 頑張り屋の花子

- (65) a. *健二の努力家
b. 健二は努力家だ → 努力家の健二

- (66) a. *優子の働き者
b. 優子は働き者だ → 働き者の優子

- (67) a. *お父さんの有名人
b. お父さんは有名人だ → 有名人のお父さん

- (68) a. *先輩の儉約家
b. 先輩は儉約家だ → 儉約家の先輩

以下の例は判別が難しいものである。

- (69) a. ?お姉ちゃんの幸せ者
b. お姉ちゃんは幸せ者だ → 幸せ者のお姉ちゃん

(69)が発話される状況として、本当に心の底から人の幸せを讃えて「NP1 の幸せ者」と言うことよりも、幸せを羨む気持ちから「NP1 の幸せ者」と言うことの方が多いと思われる。このときの「幸せ者」にどのような気持ちを添えているのかによるので、ポジティブな意味なのかネガティブな意味なのかは判別付けがたく、どちらとも言える表現である。

以下の例についても考えたい。

- (70) a. お父さんの頑固者
b. お父さんは頑固者だ → 頑固者のお父さん

- (71) a. お父さんの頑固
b. お父さんは頑固だ → ?頑固のお父さん

- (72) a. お父さんのいじわる
b. お父さんはいじわるだ → ??いじわるのおとうさん

(70a)と(71a)は「お父さんが頑固である」という意味はほとんど同じだが、(70b)と(71b)には容認性に差があるように感じられる。(71b)に関しては、「頑固なお父さん」という表現の方が

「頑固のお父さん」よりもはるかに容認性が高い。(72)に関しても同様で、「いじわる」という否定的な表現であるにも関わらず(72b)は「いじわるなお父さん」の方が「いじわるのお父さん」よりもかなり容認性が高い。「頑固」や「いじわる」は名詞としての性質も形容動詞としての性質も持ち合わせているため、このように容認性の差が出ると考えられる。「頑固者」や前出の「人気者」なども「NP2 ナ NP1」と言い換えることができるが、「NP2 ノ NP1」の方が容認性が高いように感じられる。

NP2に関する考察をまとめると、以下のようになる。

- (73) a. 否定的な意味合いを持つ名詞である
b. 名詞の性質によって、容認性が変わる

3.3. 「NP1 ノ NP2」と「NP2 ノ NP1」のちがいは

(3a)と(3b)はどちらも「お姉ちゃんはおうそつきだ」という意味の表現であるという点で一致しているが、これらは全く同じ意味を為すのだろうか。細かな場面状況などを考えながら考察していく。

- (3) a. お姉ちゃんのおうそつき
b. ousotsumiのお姉ちゃん

(3a)は、実際に嘘をつかれた時や嘘が判明したときに使われることが多い。真実とは異なることを言われた時、あるいは前に述べたことが嘘であったと明かされた時に「お姉ちゃんのおうそつき」と言って批難する。常にousotsumiであるという必要はなく、たとえそれがNP1(お姉ちゃん)にとって人生で初めての嘘であったとしても、嘘をついたという事実もしくは話者にそのような認識があれば「お姉ちゃんのおうそつき」は発話される。それに対して(3b)は、お姉ちゃんが常日頃嘘をついているという事実あるいは話者にそのような認識が必要である。お姉ちゃんを話題にするその時に嘘をついたかどうかや嘘が判明したかどうかは問題ではない。例えば、「ousotsumiのお姉ちゃんが今日はひとつも嘘をつかなかったね。」と言うと、話題こそ「嘘をついたかどうか」であるが、(3a)とは状況が違っている。「ousotsumiのお姉ちゃんが今日もうそをついたよ。」と言うこともできる。

他の例を見てみよう。

- (74) a. お父さんのわからず屋
b. わからず屋のお父さん

例えば留学に行きたい娘が父の了解を得たいとする。今までは何でも許してくれた父がわかってくれないと、娘は(74a)のように「お父さんのわからず屋！」と言って批難するだろう。父の性格として日頃からどんな話にも理解を示さないわからず屋であるかどうかは重要では

なく、この時娘の話をわかってあげられなかったことが重要である。それに対して、常日頃からわからず屋な父であったとして、娘が留学について父から了解を得られたとすると「わからず屋のお父さんを良く説得できたね」と家族から言われるだろう。(54(74b)では、父がいつもわからず屋であることが重要なのである。

入れ換えてできるこれら二つの表現は「NP1はNP2だ」という意味であることに違いはないが、それぞれの表現が使われる状況や背景、そして含む意味の違いがあることがわかる。

4. まとめ

叙述関係をもつ「NP1 / NP2」について、これまでの考察を以下のようにまとめる。

(75) 「お姉ちゃんのうそつき」型が発話される条件

話者が、第三者ではなく対象となる NP1 に直接訴える内容を発話する時

(76) NP1 の条件

- a. 人や動物を表す名詞、あるいは物を擬人化した名詞である必要がある
- b. 話者が対象となる NP1 に直接呼びかける特定の呼び名である名詞でなければ容認されず、あらゆる人に同じように使う人称代名詞や指示代名詞を含む名詞では容認されない

(77) NP2 の条件

- a. 否定的な意味合いを持つ名詞である
- b. 単語の名詞としての性質に強いほど容認性が高くなる

今まであまりトピックとして挙がっていなかった「お姉ちゃんのうそつき」型の名詞句について、以上の条件を提案する。

謝辞

本論文を執筆するにあたり、担当教員の上山あゆみ先生には、非常に丁寧なご指導をいただきました。ご多忙の中、面談においてもメールでのやりとりにおいても、親身に相談に乗ってくださり、いつも的確なアドバイスをいただくことでとても励まされました。この場をお借りして深く感謝の意を申し上げます。また、九州大学文学部言語学研究室の老岐勝氏には、論文執筆に際しテーマを決定する段階から完成まで、貴重なアドバイスを数多くいただきました。心から感謝申し上げます。その他言語学研究室の院生の皆さまをはじめ、たくさんの方々に支えられ、この論文を完成に至ることができました。本当にありがとうございました。

参考文献

- 上山あゆみ(2011) 言語学・応用言語学講義Ⅱ 11月24日分資料
- 加藤重広(2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』第6章 ひつじ書房
- 寺村秀夫(1991) 『日本語のシンタクスと意味 第Ⅲ巻』第8章 くろしお出版
- 西山佑司(2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論—指示的名詞句と非指示的名詞句—』
ひつじ書房
- 三宅知宏(2011) 『日本語研究のインターフェイス』第6章 くろしお出版